

日立の風土

(株)地域開発研究所 笹谷康之

In this paper I tried to draw a framework on cultural climate of Hitachi City. These subjects are studied by interpreting "The Hitachi Topography" written in the Nara Era.

It is noted that the city and the sea are separated by about 30 meters high cliffs. I hope to clarify natural and cultural climate in terms of the characteristics of the mountain, the river, the sea and the villages.

1. はじめに

風土ということばは、古代より使われていた。奈良朝初期に編述された「風土記」には、古代の国土と、古代人の生活・習俗が生き生きと記されている。幸い、常陸国には「常陸国風土記」が残されているので、この記述を解釈しながら、日立市域及びその周辺の風土をテーマに論じる。

日立市は、図-1に示すように、東側に太平洋を、西側に多賀山地を有し、その間の東西2km、南北20km程の細長い海岸台地の上に市街地が展開している。この市街地を分断して、西から東に30本もの川が流れ込む。太平洋とは、概ね20~30mの海崖によって隔てられているのが特徴である。

全国的にみても、こういった海崖によって比較的広い市街地が海と分断されている都市はほとんど見受けられない。日立市域の旧村は、海岸台地上の岡方と、海崖の途切れる緩斜面の浜に位置する浜方に分かれる。また、多賀山地より西側の谷には山方、南部の久慈川低地には原方の集落が存在する。

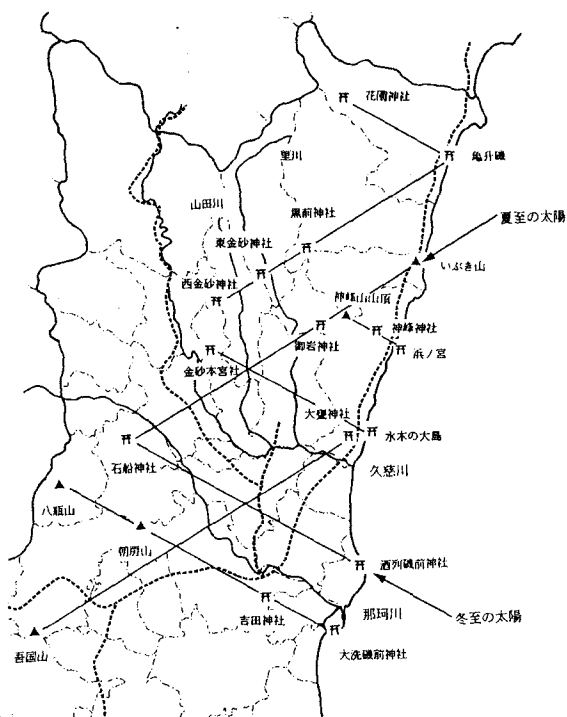
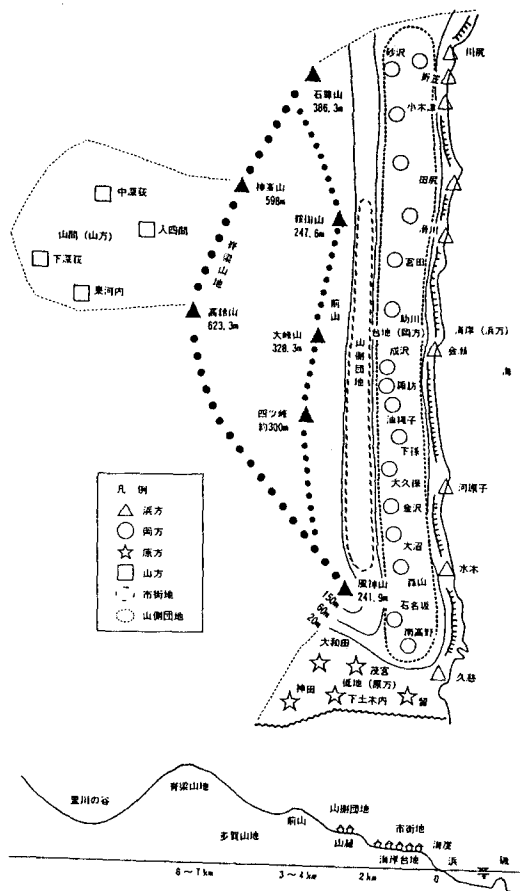
こういった、山、川、海、集落にわけて、その自然的、文化的な風土の特徴を示す。

2. 山と太陽の出没方位

「常陸国風土記」の久慈郡の章には、日立市内に比定される山として賀毗礼山が以下のように記されている。

「東の大き山を賀毗礼の高峰と謂ふ。即ち、天つ神在り。名を立速男命と称ふ。一名は速経和気命なり。本、天より降りて、即ち松沢の松の樹の

正員 工博 (株)地域開発研究所



八侯の上に坐しき。神の祟、甚厳なりき。人有り、向きて大小便行る時は、災を示し、疾苦を致さしめしかば、近側に居む人、毎に甚く辛苦みて、状を具べて朝に請ひまをしき。片岡の大連を遣して、敬ひ祭らしむるに、祈みて日ししく『今、此処に坐せば、百姓近く家して、朝夕に穢臭はし。理、坐すべからず。宜、避り移りて、高山の淨き境に鎮まりたまふべし』とまをしき。是に、神、禱言を聴きたまひて、遂に賀毗礼の峰に登りたまひき。其の社は、石を以ちて壇と爲し、中に種属甚多く、并、品の宝、弓・棒・釜・器の類、皆石と成りて存れり。凡て、諸の鳥の経過ぐるものは、尽に急く飛び避りて、峰の上に当ること無く。古より然爲て、今も亦同じ。即ち、小水有り、薩都の河と名づく。源は北の山に起り、南に流れて同じく久慈河に入る。〔以下略〕」

賀毗礼山は、現在の御岩山または、神峰山に比定されている。御岩山は、寛永7年(1630)に出羽三山が勧請されて、江戸期には、水戸藩の修験靈場として栄えた山である。山頂からは石鏃、石斧、須恵器、土師器などが出土しており、祭祀遺跡の存在が知られている。「立連男命の祟りが大きく村人を困らせるので、朝廷が片岡大連を使わし、立連男命を賀毗礼の峰に移り住むよう説得した。」という主旨の記述は、中央政府による土着勢力の懐柔を示している。

「常陸国風土記」の中には、他にも鬼、猿、蛇などが登場して、中央政府に抵抗している。その抵抗の拠点が、賀毗礼の峰であり、西金砂神社・東金砂神社・真弓神社・黒前神社・花園神社の常陸五山と呼ばれる久慈郡と多賀郡(いずれも日立市域を一部に含む)の山中の神社であった。

古語では海も天もいずれもアマと読む。神はアマからやってきた。古代人は、海の彼方から磯に神が来臨するのと同じ様に、天から山に神が降臨すると考えていた。天にいる神は、恵の雨を与えると共に、時として神鳴り(雷)を轟かせて天から訪れ(音連れ)た。人々は神が依りつく山・巨石を神体山・磐座として信仰した。人々は荒ぶる神の怒りを静め、幸福を祈り、山頂や山を望む重要な地点、神磯に臨む拠点など聖なる祭場とみなした。そういった聖地に設けられた社が神社であ

る。

茨城県北地域で、風土記などに記された神々の伝説の山と磯、古式豊かな神社を地図上に表してみると、図-2のような太陽の出没方位に関する興味深い事実がわかる。北から、花園神社と天妃山・亀升磯、神峰山山頂(本宮)と神峰神社と浜ノ宮、金砂本宮社と水木の太島、石船神社と酒列磯前神社、八瓶山と朝房山と水戸の吉田神社と大洗磯前神社が、西北西から東南東に東西軸より30°傾いて五本平行に並んでいる。これは、ちょうど冬至の太陽が昇る方位に当たる。これらの山側の神社は、後に詳述するが、それぞれ海側の神社や神磯へ降りる浜降りの神事を執り行ってきた。さらに、西金砂神社と東金砂神社と黒前神社と天妃山・亀升磯、八瓶山と石船神社と御岩神社といぶき山、吾国山と大甕神社が、西南西から東北東に東西軸より逆に30°傾いて並んでいる。つまり、西の山側からみて、夏至の太陽が昇る方向に磯があり、東の海側から見て冬至の太陽が沈む方向に山があることになる。これは、偶然の一致とはいえない。常陸国は日の出ずる国として古来より重要な場所とみなされてきた。常陸国は、五本の冬至日の出方位と、三本の夏至日の出方位と、古代の国土計画上重要な意味をもった方位線、測量軸と考えられる。

日立の語源は、神峰山から太平洋を見て徳川光圀が名付けたという伝承がある。また、海を遠望する多賀山地や海崖の上の数カ所に、太陽信仰の一つである天道信仰の塚が存在する。日立市域は、太陽の出る地域なのである。

3. 台地を横切る川と豊かな泉

「常陸国風土記」の久慈郡の章には、泉や川の姿が以下のように記されている。

「称ふ所の高市、此より東北二里に密筑の壑あり。村の中に淨き泉あり、俗、大井と謂ふ。夏は冷にして、冬は温かし。湧き流れて川と成る。夏の暑き時、遠邇の郷里より酒肴を齎賚て、男女会集ひ、休遊び飲楽めり。其の東と南とは、海濱に臨む。石決明・棘甲羸・魚・貝等の類、甚多し。西と北とは山野を帯ぶ。樵・樵・樵・栗生ひ、鹿・猪住めり。凡て、山海の珍しき味、悉に記す

べからず。此より良三十里に、助川の駅家あり。昔、遇鹿と号く。古老の日へらく、倭武の天皇、此に至りたまひし時、皇后、参り遇ひたまひき。因りて名づく。国々宰、久米の大夫の時に至り、河に鮭を取るが為に、改めて助川と名づく。俗の語に、鮭の祖を謂ひて、須介と為す。」

歌垣が行われ、古代のコミュニティーの拠点であった水木（密筑）の泉が森は、現在でも滾々と湧水をたそえている。スケ（東国方言で鮭のこと）が多く捕れたので名付けられた助川は、現在の宮田川に当たる。現在でも、市役所がある宮田川の南側一体は助川と呼ばれている。

日立市内を流れる川は、市域の南端を流れる一級河川の久慈川（延長 123.6km）と、十王町を流

下して市域に流れ込む北端の二級河川の十王川（延長 14.8km）を除けば、何れも 10km 未満の小河川である。これらの川は、海岸台地をときに浅く、ときに深く掘り刻んでいる。ほとんど掘られてない川は、海崖に連して滝となり砂浜や海に流れ込む。浅く広く削られた谷は水田に利用されてきた。また、平坦な台地が深く削られた谷は、台地上の畑や市街地と異なって、別世界の自然に恵まれた溪流を形成している。

宮田川は、市域の中心を 10～20m 程掘り割って流れる溪流である。この川は、かさき川とも呼ばれているが、これは、八幡太郎義家が笠を置いたと言う伝説が残る河口の笠置島にちなんだとか、地元でカサキと呼ぶシロウオが多く捕れたからだという言い伝えがある。シロウオは体長 3 cm 程の透明な魚で、すくい上げるとアメ色に変わり、美味な魚である。シロウオは、一時期川の汚染によって見られなくなったが、近年では主な河川に少しづつ戻ってきている。

鮎川は、宮田川以上に市域を掘割った自然の豊かな溪流である。その名のごとく、鮎にちなんで名付けられた。日立市域の川は鮎・鮎・シロウオという高級な魚に恵まれていたのである。

これらの川には、堰や水車が数多く設けられていた。大正時代には、宮田川に 13 軒、鮎川に 23 軒の水車が存在したという。これらの水車は、精米・製粉・製麺ばかりか、製菓、製紙（冬の農閑期に和紙が作られた）、寒水石や砥石の粉砕や

研磨（大理石である寒水石と中砥石が産出する）、配電盤の加工、杉の葉の製粉（線香作り）など、多様な用途に使われていた。

4. 海と浜の神々

(1) 海の幸と漂着神

「常陸国風土記」の多珂郡（現多賀郡）の章には、以下の記述がある。

「其の道前の里に飽田の村あり。古老の日へらし、倭武の天皇、東の垂を巡りまきむと為て、此の野に頓宿りたまひしに、人有り、奏して日へらく、『野の上に群れたる鹿、数無く甚多なり。其の聲ゆる角は、蘆枯の原の如く、其の吹気を比ふれば、朝霧の立てるに似たり。又、海に鰻魚有り。大きき八尺ばかり、并、諸種の珍しさ味、遊理□多』といひき。是に、天皇、野に幸して、橋の皇后を遺して、海に臨みて漁らしめ、獲物の利を相競はむと、別きて山と海の物を採りたまひき。此の時、野の狩は、終日駈り射たまへども、一つの穴をだに得たまはず。海の漁は須臾がほどに才採りて、尽に百の味を得たまひき。鰻魚、已に畢へて、御膳を差め奉る時に、陪従に勅りたまひしく、『今日の遊びは、朕と家后と、各、野と海とに就きて、共に祥瑞俗の語に佐知と日ふ。を争へり。野の物は得ずと雖も、海の味は尽に飽き喫へり』とのりたまひき。後の代、跡を追ひて、飽田の村と名づく。」

前章に引用した水木の例や、この飽田（現在は相田と記す）の記述より、日立市域の海は海産物に恵まれていたことがよくわかる。日立の海岸では、海崖の前は、概ね 5 m 以浅は砂地が多いが、それ以深はほとんどが磯場となっている。私が浜は日立市田尻町の海岸であると比定されている。また、石壁の観世音菩薩としては、現在の海岸からは 1 km ほど内陸に入るが、日立市田尻町の度志前の岩壁に彫られた観音像とされている。海は、海の幸を捉える豊饒の場としてだけでなく、信仰の拠点であることがわかる。

こういった信仰面から海をみた場合、日立では、神磯、海崖上や砂浜の離れ岩に祭られた神社、内陸の神社のそれぞれが、海の信仰と結びついていることがわかる。これらの神磯や神社の多くは、

海上他界より来訪したり漂着したりする神々を縁起・由来としていることが多い。

柳田国男は「うつば舟の話」のなかで、豊浦の浜（日立市川尻町）の蚕養神社を取り上げ、「欽明神社の御子、天竺旧仲国霖夷大王の姫金色女、継母の憎しみを受けてこの舟に載せて流される。後久しからずして病みて身まかり、その霊は化して蚕とある。是れ日本の蚕飼いの始めなりと語るものがあつたそうである。」と論じている。

遇鹿の里で倭武尊が橘姫と逢ったとされる会瀬では、七夕磯と呼ばれる神磯がその出会いの場所と伝承されている。

(2) 神磯

日立の海岸には、少なくとも北よりオンネ磯（川尻）・虎磯・七夕磯・オサガメ磯・オンネ磯（河原子）・大島磯・御根磯（久慈）と呼ばれる7つの神磯が、海岸から数十mから1kmほど離れた位置にあった。虎磯は、大磯やオンネ磯と呼ばれたり、神峰神社の沖宮としての位置づけがあるため沖峰と呼ばれていた。オンネのネとは根のことであり、水中から盛り上がった磯鋸とである。また、激しい波音を轟かせるオンネ磯に対しては、音根磯とも記されており、神は音(ト)を連(ツ)りて海上他界から来訪した、すなわち訪れ(トツリ)たと解釈できるのである。

オンネ磯は漁業者の厚い信仰を集めており、新年の初船出である出初では、オンネ磯の周囲を回って御神酒を挙げる習慣がある。久慈の御根磯では、漁業者により磯の上に鳥居の建立が検討されてきた。漁業者や郷土史家のヒアリングをまとめると、こういった神磯は、単なる信仰の粹組みを越えて、次のような機能を有していると考えられる。

① 危険回避のランドマーク

水深が深い海域にある浅い磯であり、船を近づけると座礁する危険があるため、触らぬ神に祟りなしとのことで、むやみに神磯に近づかない習慣が成立したと考えられる。

② 出入港のランドマーク

神磯は浅い磯で白波が立って目立つので、これを目印として船を左右に振って港に出入

りした。

③ 天然の良港となる静穏域の形成

水深が浅いがゆえに神磯が防波堤の役目を果たして、内側の海域の静穏域が形成されている。よって、神磯は港の守り神なのである。

④ 海象・気象の指標

常に白波が立つ磯なので、波の規模・方向・形態によって天候・潮流・波の予報を行い、出漁の可否を決める参考とした。

⑤ 水産資源の保全

神磯として水産資源の捕獲が禁止されているため、鮑などの、貝類、稚魚の魚礁となり、沿岸の水産資源の保全・育成に役立った。

(3) 浜辺の上の眺望地点

日立海岸には、海に面して43の神社・小祠が存在していた。これらの神社・小祠は、おおむね海岸集落の外縁にあって集落・砂浜・港・海を臨む次のような地形の場所に立地していた。

① 海崖の上端

② 岬・崎・鼻などと呼ばれる海に張り出した尾根の先端

③ 砂浜に取り残された離れ岩

特に、大半の神社・小祠は、海崖の上端に位置している。この、日立海岸に面した海崖を望む台地の上には縄文弥生時代より人々が居住していた。その一つの南高野貝塚は、現在では茂宮川に面しているが、縄文時代には海に直面した場所にあり、貝類の他に土器・石器・釣針などが発掘されている。海を望む台地の上で、海の幸にめぐまれた生活を送っていたことがわかる。

古墳時代（4世紀～7世紀）には、海崖沿いにいくつもの古墳が設けられた。なかでも茂宮川や旧久慈川に面した舟戸山古墳は大規模な前方後円墳であり（現在では墓地により一部消失）、久慈川と太平洋の水運を支配する有力者がいたことをうかがわせている。また高磯古墳群・浜ノ宮古墳群・田楽鼻古墳のように、太平洋を望む海崖上の突端に、神社・聖地とともに存在している古墳が多い。そもそも古墳とは、単なる首長の墓ばかりではなく、政治的なモニュメントであり、海から目立ち、海を望みやすい場所にあった。

中世には、滑川浜館・相賀館・要害城・孫沢館・久慈城など、片方を海崖にとり囲まれ、陸側に堀割を設けた城郭が築かれた。

近世になると鎖国とともに水戸藩の異国船客所が水木・川尻に設けられた。異国船が頻繁に訪れるようになった幕末には、川尻・大沼に陣屋が、助川の山麓に助川城が、会瀬に助川城の出城の砲台が築かれている。こういった海防は太平洋戦争期にまで続いており、鶴首岬や久慈行戸の丘には高射砲陣地や監視哨が設けられた。

このように、海崖の上の海の眺望地点は、歴史的な資源の集積する重要な地点として重層的に利用されてきたことがわかる。

(4) 浜降祭り

浜降祭とは、浜方集落だけでなく内陸集落も含めて海に降りる祭である。神社の神事は、現在の表面的な地域間交流ではなく、歴史的な地域間交流を表している。

藤田稔は「御輿が海浜に降りる神事は全国的に分布するが、太平洋岸に多く、特に九州南部と関東・東北に濃密に分布する。」と論じている。

日立市の神社は20社、常陸太田市からは13社、十王町・水府村・金砂郷村からは各1社の計36社が、日立海岸に浜降りを行っている。日立海岸のなかでも13社と最も多くの神社が浜降りを行ってきたのが水木の浜である。各神社では、水木地先の大島磯において潮水を汲んで神輿を清めるなどの磯出の神事が執り行われる。

とりわけ、西金砂神社と東金砂神社の浜降り祭は、72年に一度行われる大祭礼である。最初の大祭礼は仁寿元年（851）に行われ、爾来若干の年次の延期に見舞われても、昭和6年（1931）に至るまで16回の浜降りが行われてきた。東西金砂神社の祭礼は、浜降り祭の中で最大の祭りであり、次回の大祭礼は平成15年（2003年）である。大祭礼では、水木の田楽鼻へ御神体が渡御して、潮垢離の神事をとり行う。（昭和6年から安全のため水木浜で神事を行った）なお、6年に一度の小祭礼では、大祭礼の順路途中にある内陸の常陸太田市馬場町まで御輿が渡御し、役回りのものが竹筒をたずさえて、水木の島におもむいて海水を汲んで

戻り、御神体を清める。西金砂神社と東金砂神社は、いずれも水木の浜から直線距離にして22kmほど離れた阿武隈山地の山頂に座し、御神体を九穴の鮑としている。昭和6年の大祭礼では、準備は足掛け3年に及び、祭礼の順路となる町村では延べ数万人が奉仕活動に従事した。水木の浜で行われた田楽舞には6～7万人が集まった。このように広域的な村落の共同作業として開催される西金砂神社と東金砂神社の浜降り祭は、村落間の古い社会的結合関係を現在に伝えるものと考えられる。

5. 東西軸の生活圏

「常陸国風土記」の総記の章には、以下のような記述がある。

「それ常陸の国は、界は是れ大きく、地も亦緬邈にして、土壤沃墳ひ、原野肥衍たり。壑発きたる処、山海の利ありて、人々自得に、家々足鱗へり。設し、身を耕転るわざに勞き、力を紡蚕ぐわざに竭す者あらば、立即に富豊を取るべし、自然に貧窮を免るべし。況や復、塩と魚の味を求めむには、左は山にして右は海になり。桑を植ふ、麻を種かむには、後は野にして前は原なり。いはゆる水陸の府臈、物産の膏腴といへるものなり。古の人、常世の国といへるは、蓋し疑ふらくは此の地ならむか。但、有るところの水田、上は少く、中の多きを以て、年に霖雨に遇はば、即ち苗子の登らざる歎を聞き、歳に亢陽に逢はば、唯穀実の豊稔なる歎を見む。〔略かず〕」

この冒頭の記述は、前章までの水木や相田の記述と同様に、海の幸や山の幸に恵まれ、農産物の生育条件が良いことを示している。

浜方と岡方の集落は、対をなして古代以来の郷を形成し、海の幸と山の幸を捕る拠点集落として発達してきた。浜方から岡方を経て、さらに山中に入り行く道は、塩の路として、山へ魚介類を運ぶ路として使われてきた。

ところで、神峯神社を例にとると、里宮は台地に迫り出している尾根の先端にあり、海から2.5kmほど離れた浜の宮に浜降りを行っている。本殿のある山宮は、拝殿のある里宮から5.5km離れた多賀山地にある標高598mの神峰山の山頂に座し、浜の宮から700m離れた沖には、先述した神磯で

虎磯（沖峰）と呼ばれる沖宮が位置する。このように、沖宮・浜の宮・里宮・山宮という組合せで聖域の位置関係が構成されている。

つまり、古代には海と山を含む岡と浜の領域がセットとなって村落が形成されていたことを示している。さらにいえば、山には山宮、岡には里宮、浜には浜の宮、海には沖宮が鎮座し、それぞれの神々が連携をとりあって、人々に恵をもたらすと考えられていたのであろう。

民俗学によれば、古代において、太平洋を北上してきた人々が、現在の海辺の神社・小祠の位置を目印にたどりつき、日立の地に住みついて、さらには久慈川を遡って舟戸山古墳・凡天山古墳といった巨大古墳を築き、流域に定住したことが提唱されている。こういった人々の末裔は、先祖への郷愁から、先祖が来たルーツを求め、浜降り祭という回帰行為を行ったと考えられる。水木浜は、13の神社の浜降りの聖地であり、100近い村落にとっての象徴的な場所であるがゆえに、広域的な社会的紐帯を維持するためにも、西金砂神社・東金砂神社の次の浜降り祭が行われる2003年までには、著しく後退している砂浜の本格的な養浜が必要である。

日立市では、陸前浜街道、国道6号線、常磐線、常磐道と、国土の骨格を占める大動脈は何れも南北に連なってきた。しかし、生活の軸は、自然的

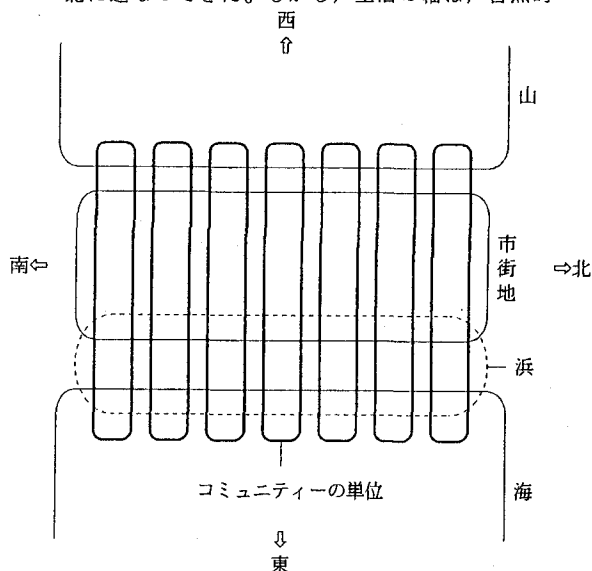


図-3 日立の風土の模式図

にも歴史的にも東西の軸であった。西の山と、東の海と、台地を東西に貫流する川は、市街地を水と緑のネットワークで梯子状に包んでいる。

測量法が定められる前の戦前の都市計画図は、旧日立市、旧多賀町、旧久慈町共に、東の海側を下に、西の山側を上にした構図で描かれている。南北軸が縦軸、東西軸が横軸ではなく、図-3に示すような南北軸が横軸、東西軸が縦軸の方がおさまりがよいかもしれない。

現在、日立市では、山では「国有林野活用計画」、市街地では「市街地整備基本計画」、海では「海の活用マスタープラン」、全市的には「全市的土地利用計画」が策定中であり、学区単位では「コミュニティマップ」「コミュニティプラン」づくりが進行中である。現在の学区は、徐々に山方と海側に分離されてきているが、伝統的なコミュニティは海と山とを東西につなぐ領域を有していた。山は山の、市街地は市街地の、海は海の計画を分離して策定するのではなく、相互に有機的に関連させる工夫が必要であろう。それには、山側と海側の学区をペアにして、山と海とを水と緑の川の軸でつなぐとともに、神社・小中学校・公民館やコミュニティセンター等のコミュニティ施設を東西につなぐ生活の道の整備が望まれる。

注1) 本稿の作成に当たっては、以下の原稿を再編成した。

- ① 笹谷康之他(1991): 海岸における聖域の研究, 日本都市計画学会学術研究論文集26
- ② 笹谷康之(1990): 神々の道, 久慈川のはとり4
- ③ 笹谷康之(1992): 甦れ 日立の川, 流々 日立市河川愛護団体連絡会編

注2) 秋本吉徳(1979): 「風土記1 全訳注 常陸国風土記」講談社より引用した

注3) 榎本実(1987): 「蔭の測量師たち 朝房山をめぐる古代の方位信仰」, 谷川健一編 (1984): 「日本の神々 神社と聖地1 関東」の記述を参考に、図-2の太陽出没方位線を策定した。

注4) 藤田稔(1989): 浜降り祭とヤンサマチ, 茨城の民俗